関口芭蕉庵の朱楽菅江狂歌碑

柴田光彦

早稲田大学のすぐそばの関口町に芭蕉庵がある。椿山荘の地続きである。芭蕉が深川に落ち着くまでの間のある時期をここで過ごしたといわれ、それは延宝五年（一六七）より八年までの間（すなわち三十四歳より三十七歳まで）のうちで、ここの竜隠庵にいて、小石川関口の神田上水の改修工事に従事したという。いま東京都の指定史蹟である。またここは、俳書の収集で名高い松宇文庫の伊藤半次郎氏が、大正十五年以来昭和十八年八十五歳で病没されるまで住まわれたところでもある。芭蕉庵は、明治十八年田中光顕伯が俳人塩坪鶯笠から譲りうけ、大正元年さらに実業家渡辺治左衛門氏に移り、いまは講談社の野間家の有となり、松宇文庫もここにまもられている。

今年十月九日より十一日までの三日間早稲田大学で俳文学会の第十七回の全国大会が開かれるにあたり、これにちなんで、本館蔵書と松宇文庫の俳書を双方で展示することになったので、私ども館員数名のものは、不順であった夏の一日を短冊整理の余暇をみて、加藤副館長とともに芭蕉庵を訪ねて、雷雨に見舞われながら、范石湖詩碑・夜寒碑・さみだれ塚碑・朱楽菅江狂歌碑などをつぎつぎに手拓した。俳書展の参考品とするためである。

ところで朱楽菅江の狂歌碑について、芭蕉庵の案内記には、つぎの如く記されている。

芭蕉堂の前なる大銀杏の後方に在り。風雨に曝されて判読しかねるが「執着の心やあとに残るらん吉野の桜さらしなの月」と刻す。

寛政十一年（一七九九年）に建てられたもの。作者は本名山崎景貫といい和漢の学に通じ、太田蜀山人とともに世に聞えた狂歌の大家である。

昨年の十二月の刊になる本山桂川氏の『写真・文学碑めぐり3』（江戸文学・東京篇）（芳賀書店）の「関口・芭蕉庵」の項も、前の案内の歌のとおり、

執着の心やあとに残るらん
　吉野の桜さらしなの月

として、

同じ辞世を刻んだ碑が向島三囲神社境内にもあることは前に記した。それには、「執着の心や娑婆にのこるらん」とある。文字も三囲神社のそれに比べると、関口芭蕉庵のは見劣

りがする。（八一頁）

とされて碑の写真をかかげ、この歌をカットにしている。また「三囲神社」の項（同書一三〇頁）には、三囲の歌碑の写真と拓影をかかげ、再び娑婆とあとの違いをのべておられる。また故海老沢了之介氏の『新編若葉の梢』（昭和三五年）にも「あと」と判読されると記されていて、文字も芭蕉庵の案内記とこれまた同じである。

朱楽菅江山崎景貫は寛政十戊午年（一七八九）十二月十二日の没であり、この歌は彼の辞世であるとされているものである

関口芭蕉庵の朱楽菅江狂歌碑

から、「あと」と「娑婆」の違いの問題は大きいことである。いずれがまことにさだまれる歌であるか。

関口芭蕉庵の碑は大正の震災で中程から折れ、その後これを修復したもので、はやくから読みにくくなっていたものである。碑の下面は土深く埋もれている。（高さ一・八二米、巾一・二七米程中）。私は少しく土を掘りさぐってこれを拓録した。

「□着の　　朱楽菅江

ゝゝろや□安婆に

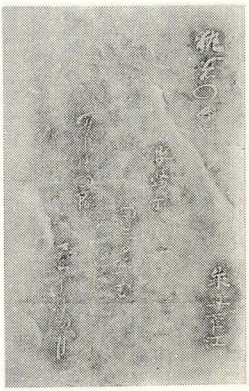
□るらん

よしのゝ桜

さらしなの

月」

拓影はまさしく「あと」でなく「娑婆」であった。そしてまた「吉野」でなく「よしの」であった。（菅江の「江」は文字はあるが、さらに土を除かなくては拓することができない。）おもうにこれは、何時の頃か芭蕉庵の案内記を草するにあたって執筆者が間違い写したものを、海老沢氏



（三囲神社菅江狂歌碑拓影）

も本山氏もそのまま採録されたのであろう。本山氏は傷んだ碑面をみてこれを手拓されなかったものと思われる。

碑陰は埋もれているが、わずかに、

寛政己未

と読むことができる。己未はすなわち菅江の一周忌にあたっており、それ以下の文字の録せぬのが残念である。

私は三囲のそれと芭蕉庵のこれを比較するとき、むしろ芭蕉庵の書に愛着を覚える。決して見おとりはしない。筆勢においてむしろ優れているとみたい。書の善悪は一概には論じられないものではあるが……。

―昭和四〇・九・一―

（本館特別資料室員）